

優秀賞

はなちゃん

福岡県 屏水中学校 三年 木下 舞桜

私は夏休みの間、母が勤めている福祉施設にお手伝いに行っていた。そこには、笑顔のすてきなかわいらしいおばあちゃんがいた。

「みなさん、おはようございます。今日は一日、お世話になります!」

「あらあ、はなちゃん! 来てくれたの。」

いつもそう言って、満面の笑顔を見せてくれるこのおばあちゃんの名前はまりこさん。

「はい。」

「大きくなったわね。かわいいねえ。」

そういう会話と状況が五、六回。多いときはもつくり返す。そうして、一日が過ぎる。

初めて会ったとき、私は名前をきちんと言い、

「まおちゃん、というの。そう、まおちゃんね、かわいい名前ね。大事にしてください。」

という答えが返ってきた。でも、十分後には、

「はなちゃん、だったわよね。」

「いいえ。私はまおです。」

「あら、そう、ごめんなさいね。まおちゃんね。かわいい名前ね。」

まりこさんは、申し訳なさそうにほほえんでいた。私は、名前をまちがってしまうことがわざとには思えなくて、申し訳なさそうにしているのを見ると、自分の名前を訂正することが正しいのか、なぜ「はなちゃん」なのか、よくわからない気持ちが消えなかった。

まりこさんは、「アルツハイマー型認知症」という進行性の病気で、記憶をなくしていくのだそうだ。すぐに忘れてしまう。でも、自分の記憶の中で大切な思い出や辛かったことは、よく覚えていることが多いそうだ。

「お母さん、まりこさんって、はなちゃんっていう名前のお孫さんがいるの?」

「いると思うけど、もう大人だよ。」

「私のことを、はなちゃんって言うよ。」

「たぶん、そのはなちゃんが、あなたくらいの頃の記憶が残っているのではないかな。」

まりこさんの秘密を知って、はなちゃんと過ごした時間は、まりこさんにとって忘れられないものなのだと思う。だから私は、まりこさんと話をするときは「はなちゃん」になることにした。それがよいことか、悪いことかは、わからないままだ。

正しい名前を名乗るべきかもしれない。だましてはいけないことかもしれない。でも、私が「はい」と答えると、本当にうれしそうで、満足そうな笑顔になる。幸せな思い出や記憶の中で今の生活をしているのなら、それでもいいのではないかと私は思う。

だからまた、まりこさんの隣に座ったとき、まりこさんは笑顔で尋ねる。

「あなた、はなちゃんだったわよねえ。」

「はい。」

「大きくなったわね。かわいい。」

の会話から始めようと思う。これからも、ずっと。